

奈良県生駒市法葉寺蔵 『矢田地蔵縁起並地獄絵』 について

― 「欲参り」 絵の展開 ―

日 沖 敦 子

はじめに

奈良県大和郡山市の矢田山麓に、矢田寺という高野山真言宗の寺がある。古くから地蔵の霊場として知られ、正式な寺名を金剛山寺という。護国寺本『諸寺縁起集』によると、当初の本尊は十一面観音だったが、平安時代に満米上人が中興し、上人にまつわる矢田地蔵の霊験譚が広まるとともに、地蔵菩薩が本尊となったという。室町時代末期に兵火により罹災するが、江戸時代には二十ヶ坊が残ったとされる¹⁾。

一方、京都市中京区にも、矢田寺という寺院がある。寺町通りに西面する、この矢田寺は、金剛山寺の別院だったが、現在は本寺から独立し、西山浄土宗の寺院となっている。今日、両寺間に交流はほとんどない。しかしながら、同様の満米上人の地蔵菩薩霊験譚を伝えており、両寺ともそれに関わる掛幅絵や絵巻を所蔵している。

『矢田地蔵縁起絵』の伝本は、数多く知られる。それ

らは、第一類と第二類に大別され、研究が深められてきた²⁾。第一類は、本尊矢田地蔵の造立由来譚と霊験譚を描く縁起絵である。第一類の説話要素から分岐発展して生まれたのが第二類である。金剛山寺では、毎月特定の日に参詣を繰り返す「欲参り」によって、生前の罪が消え、死後、地獄の苦しみから救われるという利益が喧伝された。第二類は、この「欲参り」に格別の功德があることを地獄・六道絵と絡めて描いたものである³⁾。第二類で掛幅絵のものは、従来、金剛山寺に伝来する一幅『和州矢田山地蔵菩薩毎月日記』（以下、金剛山寺本）が知られるのみであったが、近年、渡浩一氏の精力的な調査により、新たな絵画資料が見出され、研究が進展している⁴⁾。二〇一五年七月二十日から八月二十一日まで、生駒ふるさとミュージアムで開催された企画展「異界をのぞいてみよう」に、これまで研究されていない『矢田地蔵縁起絵』の伝本が展示された。奈良県生駒市南田原町の法

薬寺（真言宗御室派）にある『矢田地蔵縁起並地獄絵』一幅（二一〇・〇×一七五・〇cm、紙本著色、以下、法薬寺本）である（図1・図2）⁵。寺は無住のため、法薬寺自体は、現在三十六軒ある講の家々の持ちまわりによって保管されてきた。地藏盆の日には、近隣の参詣者が訪れ、夕刻には、講の人々を中心に数珠繰りが行われる。講の方の話によれば、これまでも毎年、四月八日の薬師如来の祭礼と八月二十三日の地藏盆の日には、本堂に掛けられてきたが、博物館などでの展示は、今回が初めてのことであるという。筆者はその後、地藏盆の折、詳細を確認する機会を得た。

法薬寺本は、保存状態が良く、人々の表情や極彩色の来迎の様子などが細やかに、かつ鮮明に描かれている。全体としては、特に、金剛山寺本に近似した図様で、十八世紀頃に制作されたものと推定される。法薬寺本は、金剛山寺本同様、第二類に分類でき、「欲参り」に基づく信仰を図案化した内容となっている。法薬寺本は、金剛山寺本とあわせて、「欲参り」絵の広がりをお互いに合わせる絵画資料として貴重である。

本稿では、先行研究に学びつつ、『矢田地蔵縁起絵』と「欲参り」について整理し、「欲参り」が盛んとなった背景について考察する。そのうえで、新たに紹介する

掛幅絵を所蔵する法薬寺について探り、法薬寺本の特徴について検討したい。

一 『矢田地蔵縁起絵』と「欲参り」

はじめに、『矢田地蔵縁起絵』に共通して記されている説話の概略を示そう。そのうえで、金剛山寺本の「欲参り」に基づく信仰が、次に挙げる『矢田地蔵縁起絵』の説話内容B「武者所康成（安成）蘇生譚」の月詣に由来することを確認したい⁶。『矢田地蔵縁起絵』は主に、次のA（本尊造立由来譚）とB（武者所康成蘇生譚）、二つの話から構成されている⁷。

A（本尊造立由来譚）

大和国添下郡金剛山寺に延暦十五年より満米上人という僧が住んでいた。上人の帰依者に小野篁という人がいたが、彼は身はこの世にありながら、魂は閻魔王庁に仕えるという人だった。ある時、閻魔王が憎悪の苦に悩まされていたが、その対策として閻王が菩薩戒を受けることになり、篁の推挙で満米が戒師として招かれることになった。王は早速冥官を派遣して上人を招き、受戒した。お蔭で王宮から苦は去り、王は喜び、上人に望みの布施を申し出た。

上人は生死の苦果を厭うために地獄見物を望み、王は上人を阿鼻地獄に案内した。上人は凄まじい地獄の様を見たが、炎の中に一人の僧を発見する。それは地蔵であった。地蔵は上人の近くにやってきて、授戒の効果とその喜びを述べ、同時に、自分の大悲代苦をもってしても無縁の衆生は救えない、人間界に帰ったら、私に結縁するよう人々に勧めよと話した。王は上人を冥界に人間界まで送らせ、その時、小箱を上人に授けた。それは、いくら取っても尽きない白米の入った箱であった。この箱に因んで、上人は満米と呼ばれるようになった。上人は仏師を招き、地獄で会った生身の地蔵とそっくりの地蔵像を造らせ寺に安置した。今ある本尊がそれである。

B (武者所康成蘇生譚)

大和国宇智郡桜井郷に武者所康成という人がいた。彼は幼くして父を失い、継父を得た。しかし、この継父は下司職を奪い取るなど康成に無情であった。そのため、康成は継父を恨み、天慶五年九月二十三日に殺害しようと夜討ちに入ったが、誤って母を殺してしまふ。彼は凶らずも五逆罪を犯してしまつたのは、普段から狩や漁をして殺生してきた報いかと

懺悔後悔し、金剛山寺の地蔵が靈驗秀れているのを聞き、月詣を企て母の後生を弔った。六十七年が過ぎ、天曆年中に彼は死んで無間地獄に墮ちたが、金剛山寺の地蔵に救われ蘇生した。(傍線部は筆者、以下同じ。)

宝永六年(一七〇九)成立の金剛山寺南僧坊蔵『和州矢田寺縁起』下巻の康成蘇生譚には、次に挙げる矢田地蔵の夢告により、月詣が始まつたとある。

彼毎月一度参詣を教へ給ひし日は、正月十六日、二月八日、三月十五日、四月二十五日、五月二十四日、六月三日、七月十四日、八月十八日、九月十一日、十月九日、十一月十九日、十二月二十四日、是を矢田寺の欲参といひつたへけるとなむ。

傍線部の日付は、金剛山寺本などに記されている「欲参り」の日付と一致する。このことは、これらの絵画と制作された当時の信仰の関わりを考えるうえで重要である。

二 「欲参り」と『毎月日記絵』

金剛山寺の本寺および諸院坊の念仏院、北僧坊、南僧坊、大門坊に残されている二五四点の版木については、元興寺文化財研究所よって調査され、影印とともに紹介された⁹。特に興味深い版木として、念仏院が所蔵する「矢田地蔵菩薩像」の版木が挙げられる。版木の表面には、右手は親指と人差し指を、左手は親指と中指を結んだ印相の矢田型の地蔵菩薩像が刻まれている¹⁰。そして裏面には、「和州矢田寺地蔵菩薩毎月参詣（之カ）日記」が刻まれ、「永禄六年癸亥八月吉日 本願（念仏堂カ）」の奥書がある（□部は判読不能、以下同じ）¹¹。

和州矢田寺地蔵菩薩毎月参詣（之カ）日記

□^{（正月カ）}十六日 八万五千ノツミメツス。シテノヤマヲ（山）
 □^{（カルカ）}ノ
 □^{（二月カ）}八日 二万億劫ノツミメツス。ツルキノヤマヲ（山）
 □^{（カルカ）}ノ
 □^{（三月カ）}十五日 三万五千ノツミメツス。サンツカワヲ（湍川）
 □^{（カルカ）}ノ
 □^{（四月カ）}廿五日 九万八千ノツミメツス。カキタウヲ（熊笹道）

□^{（五月カ）}廿四日 一万五千ノツミメツス。チクシヤウタヲ（畜生道）
 □^{（ラノルカ）}□^{（ラノルカ）}
 □^{（六月カ）}三日 三千二百ノツミメツス。アヒチコク（阿鼻地獄）
 □^{（ラノカルカ）}□^{（ラノカルカ）}
 □^{（七月カ）}十四日 五万五千ノツミメツス。ヲニノクチヲ（鬼）
 □^{（カルカ）}□^{（八月カ）}八日 九万六千ノツミメツス。シ□^{（ユカ）}ラタフヲ（罪滅）
 □^{（九月カ）}□^{（九月カ）}十一日 六千七百ノツミメツス。コウノハカリ（釋）
 □^{（カルカ）}□^{（十月カ）}九日 八万三千ノツミメツス。クロカネノマロ（鉄）
 □^{（十一月カ）}□^{（十一月カ）}十九日 三万五千ノツミメツス。
（無間地獄）
 □^{（十二月カ）}□^{（十二月カ）}廿四日 十万五千ノツミメツス。
（決定往生）
 ケツチャウウシヤウ（スカ）
 永禄六年癸亥八月吉日 本願（念仏堂カ）

右の「欲参り」日を伝える版木の内容は、同じく念仏院が所蔵する「□養者三年三月一座本願念仏堂」¹²「元禄九年丙正月吉祥日」との奥書がある版木にも記されている¹²。室町時代以降、同様の刷物が流布していたことがわかる。

また、紀年銘はないが、念仏院には「地藏菩薩毎月御欲日付」の版木もあり、概ね同様のものが、北僧坊版・南僧坊版として伝わっている¹³。これらの版木は、いずれも明治時代の制作と推定され、「欲参り」日のほか、春秋彼岸の法事、四月の練供養、六月二十三日の地藏菩薩大会式、十二月九日の仏名会の日付も記されている。また冒頭に、武者所康成の親殺害の罪障懺悔により、地藏菩薩の示現を蒙り、月参りを始めたものであるとの「毎月欲参の因縁」も記されている。「欲参り」日が、康成の由来譚に起因するとの縁起とともに広がっていったことがわかる。

右の永禄六年（一五六三）の版木は、「欲参り」日とその利益についてのみの記述であるが、当時、既に矢田型 の地藏菩薩と共に、「欲参り」が喧伝されていたことを裏づける資料として貴重である。

なぜ、永禄六年に「欲参り」が喧伝されるべく、版木が制作されたのか。これについては、「文禄三年仲夏吉日右筆 永敵」「本願和州矢田寺念仏堂長識^敬白」との奥書がある「矢田金剛山寺地藏堂再興勸進状」（金剛山寺南僧坊文書、以下、勸進状）が参考になる¹⁴。

于^レ時永禄五年^{壬戌}仲夏廿五天、武家乱入之刻、放逸之族、本堂懸^レ火、魔風頻吹而本尊既欲^レ及^レ灰燼^一。爰寺住之僧侶任^二命於薩埵之悲願^一、飛^二入猛火之中^一、無^レ悉尊躰奉^レ出訖。誠非^二本尊之加被^一者、不^レ燒^二有侍之依身^一、非^二諸天加護^一者、劣弱老身得^レ奉於哉。

永禄五年五月二十五日に本堂が炎上し、寺僧が猛火の中から本尊の地藏菩薩を救出したとある。この勸進状が記されたのは、奥書にあるように、文禄三年（一五九五）のことで、実に、本堂炎上から三十三年後、地藏堂の再興が試みられた時のことだった。地藏堂再興のための勸進に際しての本願は、念仏堂の僧侶である。永禄六年の版木末尾の欠字部分にも、おそらく「念仏堂」とあったのだろう。

この念仏堂は、元禄九年（一六九六）銘の「和州添下郡矢田山地蔵菩薩毎月欲日事」にも「一座本願念仏堂」、安政五年（一八五八）銘の「常行念仏勸進帳旨趣」にも「和州矢田山本願念仏堂」とある¹⁵。念仏堂は、金剛山寺の中でも、所属寺社の造営・修復に関わる実質的な運営管理や勸進を専門的に担う寺坊組織（本願）として機能していたようである¹⁶。

永禄五年の本堂炎上については、寛文元年（一六六一）

の「矢田寺経堂勸進表」に、次のようにある 17。

矢田寺経堂勸進表

夫矢田寺者、仁王四十代之帝天武天皇与大伴王子謀反之時、為伽藍建立御願、所令草創靈場也。本尊十一面觀世音並吉祥天女之尊像也。其後、桓武天皇之御宇、延曆比、滿米上人住此寺、弘仁年中、小野篁与御心一而安置地藏菩薩。忝作者春日大明神現、弘工師相来、三日三夜之間彫刻、暫立惣門外、各顯四所大明神、入笠山。寔知謂春日御正作。今御本尊是也。雖然、永祿五年仲夏廿五之天、國中乱逆之刻、兵火懸本堂、伽藍不殘燒失。於中経堂炎上之後、雖再興之、年久洗雨甍空漏風。依之勸十方檀那施主、請一紙半錢助成。今此菩薩者超余聖、既為二仏中間之導師。尤可謂末世相応之尊躰。蓋能添有身、於此再興、結善縁、於此菩薩、勸進旨如件。

寛文元年九月吉日

頼誉

勸進沙門

一方、天正五年（一五七七）の金剛山寺炎上については、興福寺僧の日記である『多聞院日記』同年十月九日

条に、次のようにある。

九日 論へ出了。夕六ツ過ヨリ信貴城猛火天ニ耀テ見了。定テ落居必定々々也。先以珍重々々。明朝ハ可聞者也。扱モ永祿二年^巳八月八日ニ入国以後、悪逆万人惱事、幾千万無限事也。大仏殿ヲ始トシテ、念仏堂、受戒堂、千手堂、三如来堂^{巳上}、般若寺堂^{東大寺}、寺一円、善鐘寺一円、眉間寺、僧院、坊舎ニ於テハ、逆修坊、竹林院、尊蔵院、無量寿院、宝徳院、徳蔵院、最勝院、法輪院、広尼珠院、西園院、実相院、西林院、聖蔵院、慈尊院、来迎院、西福院、金龍院、龍興院、慈心院、如意輪院、東門院、奥発志院、龍福院、常喜院、利喜院、正法院、中坊、和喜坊、以上大旨廿八ヶ所歟。大旨焼払、其外ナラ中相果事一円彼所行也。於國中者、矢田地蔵堂、松尾寺、三妙ノ文殊堂、竹林寺、片岡タルマ寺、釜口寺、安倍寺、笠寺、在々所々神社、小寺、経論、聖教、仏像、神跡、悉以依彼悪行一國一円相果了。大業人罪障之程、扱々如何。為々々。

永祿二年以降、奈良での松永久秀の暴虐ぶりは、『多聞院日記』や、京都吉田社神主の日記である『兼見卿記』

などに繰り返し記されるところである。戦乱の最中、久秀は、東大寺大仏殿をはじめとして、数多の寺社を焼き払った。金剛山寺もその中に含まれていた。

この後、『多聞院日記』天正五年十月十日条に「戊午時ヨリ信貴城焼了」とあるように、織田信長によって信貴山城は攻め落とされ、翌十一日条には「昨夜松永父子腹切自焼了」とあって、久秀の自害が記されている¹⁸。しかし、久秀自害後も、大和国の政情は不安定なままであった。

永祿六年の銘を持つ「欲参り」の版木は、灰燼に帰した金剛山寺を何とか再興したいという願いの中で制作されたのではないだろうか。そして、この「欲参り」は、近代に至るまで、矢田地蔵への信仰を深いものとして根づかせ、寺院の経営・運営上、欠かすことができない大切な慣習となった。本寺が所蔵する、版木「月供養誘い」には、

則発願して、地藏菩薩に結縁のため、貴賤男女を不厭、月牌を勧め、右資材を以て、永代毎月功德日には、地藏菩薩の広前におゐて、香花燈明御膳供具を備へ、大法事相勤め、施主の銘々戒名俗名を讀立、廻向にあふものは、今世後世の引導に預かる事疑な

からん哉。

とあり、金剛山寺で月供養を行うよう誘う文言が記されている¹⁹。また「月牌料定」として、価格ごとに位牌作成、宝塔への奉納、過去帳への記入と供養方法が分けて記されている。このほか「月牌料志受納帳」の版木も、本寺に現存する²⁰。

三 法薬寺と『矢田地蔵縁起絵』

大和国と河内国の境界をなす生駒山地の東麓に広がる矢田丘陵は、その中腹にある金剛山寺をはじめ、古い寺社が点在する、大和国の中でも特別な地域である。その地域に位置する法薬寺は、真言宗御室派岩蔵寺の末寺で、寛文年間（一六六一〜七三）頃に創建されたと伝えられる。安政年間（一八五四〜六〇）に再建されたが、明治三年（一八七〇）に本堂が損壊し、岩蔵寺の末寺であった常福寺と合寺された。それにより、常福寺本尊の薬師如来像も合祀されることになり、今に至るといふ²¹。その後は、大正十四年（一九二五）に大改修され、平成二十七年（二〇一五）の地藏盆を終え、再び改修工事が進められている（二〇二五年十一月現在）。

法薬寺には、合祀された薬師如来像のほか、江戸時代

以降の数体の仏像、地藏盆の際に使われる百万遍大数珠などが伝来している。しかし、寺の由緒を伝える古縁起の類は現存しておらず、昭和時代に記されたと思われる寺の「由緒書」（注21参照、以下同じ）が伝来する程度で、詳細はほとんどわからない。そこで、筆者がこれまで確認できた資料を挙げながら考察することにする。

法薬寺は、現在無住となっており、安永三年（一七七四）にまとめられた『十一ヶ村村鑑』の「和州添下郡南田原村」の項に次のようであり²²、当時から既に無住であったことがわかる。

一 寺 無住 常福寺 此境内薬師堂有

右往古より除地壱町二半町

一 寺 無住 法薬寺 此境内地藏堂有

右往古より式拾間四方除地

一 寺 無住 真福寺 此境内に観音寺有

右往古より壱町四方除地

右三ヶ寺岩屋山石藤寺^註一山真言宗御宝菩提院之末寺

法薬寺本の箱は、元箱と見られ、その蓋表面には「地藏尊^{地藏}之軸^{極楽} 本尊子安地藏尊 新塔堂法薬寺什物」の墨書がある（図3）。本図が法薬寺の什物として伝えられた

ことがわかる。残念ながら、法薬寺本と関わる絵解き台本のような資料は確認できなかった。

また、法薬寺の通称は、「シンドンドー」で、その所在地の地名を新塔堂という。堂内の本尊地藏菩薩立像（木造、像高七五・三cm）の本尊の裾前には、「新塔堂^{岡村}／講中」の墨書がある。また、弘法大師坐像（木造、像高一九・二cm）の像底墨書銘には、「新塔堂／法薬寺／講中^{岡村}」とある²³。

しかし、数少ない法薬寺に関する資料で、「天和壬戌六月十八日」（一六八二年）の奥書を持つ『大和国添上郡岩屋山岩蔵寺紀』（真名本）には次のようであり、「新堂法薬寺」と称されていたことが確認できる²⁴。

新堂法薬寺は、住吉の本地堂と云ふ。住吉、惣じて此の郷の鎮神と為す。堂、地藏尊を安じ、役教法（役小角・伝教大師・弘法大師）三開祖遊化の後に建立するがゆえに、新堂と云ふなり。

本堂の脇には、鎌倉時代から室町時代初期に造立された推定されている地藏菩薩坐像の石仏があるほか、その横に、天文十一年（一五四二）の銘文を持つ六字名号の石碑がある（図4）。「由緒書」には「寛文ノ頃」に「本

尊子安地藏尊並ニ外仏ナル石地藏尊ヲ刻ミテ之ヲ安置ス」とあり、石仏や石碑の制作年代と合わない。

以上、述べてきたように、法葉寺については不明な点が多いのが現状である。しかし、法葉寺本の軸や箱書などに「金剛山寺」「矢田地蔵」といった文言が一切確認できないことは注目できる。このこととあわせて、今日、法葉寺本が「地獄極楽」を描いたもの、「本尊子安地藏」に繋がるものとして理解され、受け入れられていることは、『矢田地蔵縁起絵』の広がりとともに、『矢田地蔵縁起絵』に、他の寺社や本尊にまつわる独自の縁起絵としての性格が加わっていったことを推測させるのである。

四 『矢田地蔵縁起並地獄絵』と第二類本（『毎月日記絵』の比較）

ここでは、本稿で紹介する法葉寺本の全体像を確認していくことにしよう。法葉寺本と金剛山寺本との比較を中心に、同系統の『矢田地蔵縁起絵』伝本（第二類本）を適宜参照しながら比較検討する（図5）。

金剛山寺本を含む第二類本について、渡氏は次のように整理して、紹介している²⁵。

①奈良国立博物館蔵（絵巻一卷）（細見氏旧蔵、以下、

奈良博本）、②根津美術館蔵（絵巻一卷）（八月以前を欠く零本、以下、根津本）、③金剛山寺蔵（掛幅絵一幅）、④故武藤山治氏蔵（残欠）、⑤三浦百重氏蔵（残欠）、⑥金剛山寺蔵（絵巻一卷）、⑦金剛山寺蔵（掛幅絵三幅）、⑧東京芸術大学美術館蔵（残欠）、⑨奈良県北葛城郡河合町大字川合の地藏堂蔵（掛幅絵三幅）（以下、川合本）

①～⑤は室町時代末期から江戸時代初期、⑥～⑨は江戸時代の制作と推定されている。ここでは、法葉寺本と近似した構図をもつ金剛山寺本を中心に、法葉寺本との比較を試みよう。

大まかに分類すると、伝本は絵巻系と掛幅絵系に分けられる。ただし、⑦の掛幅絵三幅（第二・三幅が『毎月日記絵』）は、絵巻の画幅を縦に継いだような様式で、全体的に絵巻に近い構図となっている²⁶。掛幅絵系の特徴は、中央に地藏菩薩、十一面観音、吉祥天の三尊像が描かれることである。

現在、金剛山寺の本堂には、これらの三尊像が本尊として祀られており、中央の地藏菩薩像が信仰の中心となっている。金剛山寺の三尊像が中央に描かれた掛幅絵は、絵巻とは違って、本尊としての仏が、そこにいるかのよ

うな印象を与える(図6)。

全体的な図様は概ね共通しているが、細かく確認すると、法葉寺本と他の伝本には次のような違いがある。

- ① 奈良博本に見られる人頭幢や火車、刀葉樹や釘念仏の場面は、法葉寺本には見られない(③金剛山寺本にも見られない)。
- ② 法葉寺本には、③金剛山寺本に描かれている左右の十王の姿が描かれていない。また、各場面を説明する梓書も見られない。
- ③ 法葉寺本には、地獄でみた地蔵の姿をそのまま現しだそうと地蔵を彫る場面が見られる(③金剛山寺本には見られない)。(図7)
- ④ 法葉寺本の下段向かって左に描かれる三途の川の場面では、溺れる人をさらに追い込む鬼の姿が描かれている(③金剛山寺本にも見られるカ)。(図8)
- ⑤ 法葉寺本の修羅道の場面では、頭部を斬られる人や生首など、残虐さが際立つ描写が見られる。(図9)
- ⑥ 法葉寺本では、無間地獄で苦しむ人々を見た地蔵が涙を流している様子が描かれている(このほか、閻王に菩薩戒を授ける上人の表情や、阿弥陀の来迎に導かれていく往生人の表情など、人物の表情が感情

豊かに描かれている)。(図10・11・12)

⑦ 法葉寺本では、鬼に追われて死出の山を駆けあがる死者は白装束で額烏帽子をつけている。(図13)

金剛山寺本と法葉寺本は、中央に三尊を配置する点に限らず、全体的な構図もほぼ同じである。①にあるように、①奈良博本に見られる人頭幢や火車、刀葉樹や釘念仏の場面が見られない点も金剛山寺本と共通している。

一方、細部の描写に眼を向けると、法葉寺本には残忍さが強調されているように感じられる場面がいくつかある(図8・9)。また、炎の中へ真っ逆さまに落ちていく人々を見て涙する地蔵の姿も確認できる(上方左、図10)。涙をぬぐっていると見られる地蔵の姿は、根津美術館蔵『地蔵菩薩靈驗絵詞』などに見られるが²⁷、『矢田地蔵縁起絵』伝本では、比較的珍しく、地獄に墮ちた人々に寄りそう地蔵の姿として印象的である。法葉寺本は、地蔵や人物が極めて表情豊かに表現され、丁寧に描写されている。死出の山を駆けあがる死者の頭部には、額烏帽子も描かれている。

このほか④で述べたように、法葉寺本には、地獄で見た地蔵の姿そのままに地蔵像を彫る場面がある。この場面は、金剛山寺本にない。第二類では、近年紹介された

⑦金剛山寺蔵本の第一幅目には、一人の僧侶と三、四人の仏師が描かれ、矢田型の印相を結んだ地蔵が彫り上げられていく様子が描かれている(図14・図15)。地獄で見た地蔵の像を作らせる場面は、かつて金剛山寺の別院だった京都矢田寺蔵『矢田地蔵大士縁起』(二幅)の左幅、および、同寺『矢田地蔵縁起絵』下巻などにも見られる。そこには、次のような詞書がある²⁸。

地蔵菩薩、地獄のほのほの中より、罪人にかはりて
現し給へる生身の御すかたつくりまいらする所なり。
第六度まではつくりなをす。第七とには毫釐もかは
らせ給はず。

地蔵菩薩像は六回も作り直され、七度目によく完成した。生身のお姿そのものを写し出すための努力が繰り返し試みられたという。『延命地蔵菩薩経直談鈔』(以下『直談鈔』)巻七―三「洛陽矢田地蔵之縁起」では、京都矢田寺の本尊こそが、七度目によく上人によって制作された本物の矢田地蔵にほかならないと説かれている。京都矢田寺独自の縁起となっており興味深い。その本文を確認すると、次の通りである²⁹。

洛陽京極三条ノ北矢田寺ノ地蔵尊ハ御長五尺一寸ノ
立像ニシテ、満米上人小野篁ニシタガヒ冥界ニ至リ、
直ニ生身ノ地蔵尊ヲ拜シ玉ヒテ還リ、仏師ヲ招ヒテ
地蔵尊ヲ六体刻雕シ、上人能々尊像ヲ見玉フニ、獄
中拜見ノ像ニ異ナル所アルニ由テ、上人重ネテ自ら
一体ヲ刻ミ玉フニ毫髪モ違フ事ナシトテ、随喜シテ
此像ヲ本尊トセリ。

矢田地蔵縁起は、江戸時代になると地蔵縁起の由来譚として様々に転用されていったことが指摘されている³⁰。例えば、寛文五年(一六六五)書写の京都市大善寺蔵『山城州宇治郡六地藏菩薩縁起』は、満慶(満米)が地獄から帰還した後、小野篁が六体の地蔵を大善寺に安置し、うち五体を分祀した、と京都の六地藏の由来を説いている³¹。また、京都市薬師寺蔵『地藏尊略縁起』には、生六道地藏菩薩は、満米と一緒に地獄に赴いた篁が地獄で拝した生身の地蔵に像の造立を命じられ、帰還後、地蔵に与えられた冥土の土を御髪に納めて造立した像であると記されているという。このほかにも、本尊の由来が矢田地蔵と結びつけられ、寺社縁起として伝来している例は、複数確認されている³²。

先学によって指摘されてきたように、矢田地蔵縁起は、

様々な話が縁起にあわせて付加されていき、多様化していった。安永九年（一七八〇）刊『都名所図会』巻四の化野の項にも「浄息院」の地蔵が「満米上人の作」であると記されていることが指摘されている³³。

縁起によって、「試の地蔵」は「六体」（『山城州宇治郡六地藏菩薩縁起』）であったり、仏工に「十有余体」を彫らせたものの、生身の地蔵に似ていないため、満米自ら一体の尊像（試の地蔵）を刻んだ（『和州矢田寺縁起』）とする内容があったりと異なっている³⁴。地蔵が繰り返し制作されていく中で、矢田地蔵の縁起は、他の寺社の地蔵の縁起に影響を与えていったようである。

㊦にあるように、法薬寺本に金剛山寺本にはない、地蔵の形像を刻む場面が描かれていることから、絵解きの場で、類似した「試の地蔵」にまつわる話が語られた可能性も想定される。つまり、法薬寺の地蔵こそが上人が地獄で見たままの地蔵のお姿であると、京都矢田寺のように、法薬寺で語られていた可能性も考えられるのである。

金剛山寺本同様、法薬寺本には「満米上人巡獄譚」をテーマに、人々が様々な責め苦を受ける様子が描かれている。そして、いずれの場面にも矢田型の地蔵が描かれている。

㊦で述べたように、法薬寺本には、金剛山寺本の左右に見られる十王の姿や所々に確認できる「欲参り」日の棹書は見られない。しかし、基本的な図様は金剛山寺本とほぼ一致しており、当初は「欲参り」を勧め、矢田地蔵への信仰心を喚起する目的で制作されたことは明らかである。

金剛山寺本の画幅の左右に十王が描かれていることについて、渡氏は、金剛山寺本の成立背景に十王思想と地獄・六道思想、目連救母説話の融合があると指摘されている³⁵。京都矢田寺の『矢田地蔵尊略縁起』には、その冒頭に「冥府十王の次位」が列記され、その末尾には「石十王の尊像小野篁卿の御作当寺にあり。さんけいの人々よくく恐れつゝしみ拝礼あるべし」とある³⁶。矢田地蔵をめぐる信仰に、十王の存在は不可欠だった。

金剛山寺本の絵解きに際しては、本尊造立の由来をめぐる満米上人の巡獄譚、本尊の靈験を説く康成の蘇生譚、そして十王の次位、月詣の功德が説かれたものと推察される。そして、非情な責め苦にあう罪人も、金剛山寺本の上部に描かれるように、矢田地蔵により救済されることが約束されたのだろう。

また、かつて毎年六月二十三、二十四日に催されていた金剛山寺の練供養は、十王の列を先に立て、二十五菩薩

の列を後にした、地獄と極楽をあわせた独特のもので³⁷、第二類本と関連する演出であったことも指摘されている³⁸。十王の衣装は朽ちたため、近年は二十五菩薩のみの練供養となっていたようだが³⁹、金剛山寺が所蔵する明治十五年（一八八二）の『満米上人地獄廻り練供養図』を見ると、十王や菩薩の面の一つ一つに世話人や講の名前を記した紙片が貼られており⁴⁰、矢田地蔵講を中心とする人々の信仰によって練供養が支えられてきたことがわかる。十王と二十五菩薩によって作り出される練供養の独特な世界観は、金剛山寺本が描く世界観と共通している。金剛山寺の閻魔堂には、中央に丈六の閻魔王像、その左右に九王像、奪衣婆像が安置されている。これら一具の群像は、桃山時代頃には造立されていたと考えられており、奪衣婆の背面や胎内には天正十九年（一五九一）の墨書銘が確認されている⁴¹。金剛山寺本に見られる金剛山寺の十王信仰は、閻魔堂に安置されるこれらの十王像とも関係すると考えられる。

法薬寺本に「欲参り」日が書き込まれていないことから、その日付が周知のことだったからかもしれない。しかし、法薬寺本に「欲参り」日が書き込まれなかったことにより、法薬寺は法薬寺本を通して、独自の解釈で本尊子安地蔵への信仰を深めることができたとも言える。

今日、講の世話役の方々のなかに、法薬寺本を矢田地蔵と関連づけて理解されている方は一人もいらっしやなかった。幼い頃から、地獄絵として語り聞かされ、その内容に、矢田地蔵の霊験や利益については含まれていなかったという。「欲参り」日が書き込まれていないことで、現在、法薬寺本は、『矢田地蔵縁起絵』としてではなく、むしろ地獄絵として、自由に解釈され、受け入れられている。

矢田地蔵の霊験や利益と直接的には結びつかない語りだが、法薬寺本の伝来当初からのものであるか否かはわからない。しかし、最近、渡氏により興味深い報告がなされた。奈良県北葛城郡河合町大字川合の地蔵堂に伝来した三幅からなる第二類本（川合本）と、同県五條市に伝わる「笠之辻地蔵」伝説である⁴²。川合本にも、法薬寺本同様、「欲参り」日は書き込まれていない。そして、「欲参り」の創始者である康成の出身地域の伝承である「笠之辻地蔵」伝説は、矢田地蔵が康成に月詣を続けなくてもいいように計らい、「笠之辻地蔵」に参ればよいという内容になっている。

身近な地蔵への参詣を促すものであり、川合本に「欲参り」日が記されていなかったことも、法薬寺本同様、期せずして、独自の解釈で「笠之辻地蔵」への信仰を深

める良い契機となったのではないだろうか。

各地の寺社の本尊の由来譚として、金剛山寺の「試み地蔵縁起絵」をめぐる縁起が再生産されていくように、『矢田地蔵縁起絵』もまた、他の寺社で新たな語りの場を作り出していく一助となっていたのかもしれない。それゆえに、金剛山寺本と一致度の高い構図で描かれていながら、法薬寺本や川合本のように「欲参り」日の記述がない伝本が存在するのではないだろうか。法薬寺本の画幅の左右に十王が描かれていないことも、法薬寺本を語る場において、金剛山寺本が語られる場ほどに、十王が求められなかったからなのかもしれない。

おそらく、このほかにも同様の掛幅絵は複数制作されと思われる。その中には、法薬寺本や川合本のように、独自の内容を加えたり、場合によっては、簡略化した内容をもち掛幅絵もあったはずである。このことは、必ずしも矢田地蔵の靈験や利益、「欲参り」を促す動きが衰退したことを意味しているわけではないだろう。『矢田地蔵縁起絵』は、矢田地蔵の靈験を説くものとして広がっていく一方で、江戸時代以降、矢田地蔵の利益が広く認知され、他の寺社の縁起絵としても、新たな解釈をとまなびて広がっていったと考えられるのである。

おわりに

本稿では、『矢田地蔵縁起絵』と「欲参り」について整理し、「欲参り」が盛んとなっていく背景に、永禄五年（一五六二）の本堂炎上前後の金剛山寺をめぐる状況と、その後の念仏堂を中心とする勸進活動があったと推察した。そのうえで、本稿で新たに紹介する掛幅絵を所蔵する法薬寺について述べ、法薬寺本の特徴について検討した。

矢田地蔵縁起は、広く伝播し、奈良・京都の各寺の縁起にも影響を与えたことが指摘されている。第二類本の掛幅絵は、この矢田地蔵縁起に含まれる、本尊造立由来譚と武者所康成蘇生譚に基づいて制作されたと考えられる。凄まじい地獄の責め苦の様相を、画面いっぱいに描き出し、今なお見る人々の目と心を離さない。苦しむ亡者のそばに必ず寄り添う地蔵菩薩は、いかなる罪人も矢田地蔵によって救われ、極楽往生できることを、視覚的に訴える。矢田地蔵への信仰を喚起・高揚するのに極めて効果的な絵画であったと考えられる。このような掛幅絵は、金剛山寺本のほかにも複数制作されたはずで、法薬寺本は、その一例として貴重である。

金剛山寺本は、絵解きを行い、「欲参り」を喧伝すべく制作されたもので、そのような中で、金剛山寺の本尊地蔵菩薩への信仰も一層、庶民の中に広く深く浸透していっ

たと考えられている。現在確認されている第二類本の中で最も金剛山寺本との一致度が高い伝本である法薬寺本も、本来は、矢田地蔵への篤い信仰の中で生み出されたものであったと考えられる。

しかしながら、金剛山寺本をはじめとする伝本との比較から見えてきたことは、法薬寺本が金剛山寺本と近似する図様を持ちながらも、矢田地蔵の利益を説くことから離れ、地獄・極楽を描く独自の縁起絵として解釈され、法薬寺本尊の子安地藏とともに受け入れられていったということである。事実、現在、講の方々は何つても、法薬寺本と矢田地蔵との関わりを話されることはなかったし、また、法薬寺本の箱書をはじめ、僅かな諸資料からも、法薬寺と金剛山寺との関係を見つけ出すことはできなかった。

金剛山寺の諸坊が所蔵する資料には、本尊や「欲参り」日に関する版本のほかにも、「御経肩衣」や「安産守」など実に様々な版本が含まれており、興味深い。「御経肩衣」などもまた、矢田地蔵の靈験と共に語り広められたものであったのかもしれない⁴³。

様々なモノを介して本尊の利益を語り広める寺院の活動の在り方は、一般的にみられるもので、それ自体は珍しいことではない。法薬寺でも「由緒書」に「往昔ヨリ

当寺ノ鐘ノ紐ハ女子懐妊スルヤ参拜人ニ御授ケアリ。之ヲ岩田帯トシテ胸に着用スル時ハ、安産ノ御利益誠ニ灼カナルコト代々伝フル所ナリ」とあるように、本尊子安地藏尊と関連して、鰐口の紐が岩田帯として施与されていたことも、同様に考えられる。

興味深いのは、次々と生み出される金剛山寺にまつわる説話・縁起であり、それに関連して制作された絵画までもが他の寺院へと広がりを見せ、さらにその地で新たな由来をともなって語られていくという過程である。本稿で紹介した法薬寺本は、渡氏によって紹介された川合本と共に、他の寺社において『矢田地蔵縁起絵』が別の縁起や伝承と結びつきを持って新たに語り広められていく事例としても、大変興味深い絵画資料と云えるのである。

付記 執筆にあたり、法薬寺世話方の西川健氏、西川嘉映氏をはじめとする皆様に熟覧、撮影の機会を賜り、御許可をいただいた。また、金剛山寺（矢田寺）大門坊前川真澄師、高橋平明氏、渡浩一氏には、比較対象とした金剛山寺蔵『矢田地蔵毎月日記絵』（三幅本）の画像熟覧に際し、ご助力を賜った。なお、三幅本の画像は、大久保保治氏により撮影されたデータを使用させていただいた。厚く御礼申し上げます。本稿は、平成二十七年科学

研究費補助金(若手研究B)による研究成果の一部である。

【注】

- 1 『奈良県の地名』(平凡社、一九八一年)および『奈良県史 第六巻 寺院』(名著出版、一九九一年)三六二頁参照。本稿では、二つの矢田寺を区別するため、引用箇所を除き、奈良の矢田寺については金剛山寺、京都の矢田寺については京都矢田寺と記す。
- 2 ①梅津次郎「矢田地蔵縁起絵の諸相」(『絵巻物叢考』中央公論美術出版、一九六八年、初出一九六一年)、②渡浩一「地獄巡り(冥界譚)」(『仏教民俗学大系』三、名著出版、一九八七年)など。概説としては、③宮次男ほか編『角川絵巻物総覧』(角川書店、一九九五年)一八二―六頁を参照されたい。
- 3 前注②①論文。
- 4 ①渡浩一「(資料紹介)大和郡山市矢田寺蔵・新出「矢田地蔵毎月日記絵」について」(『明治大学教養論集』四〇四、二〇〇六年)。②同「矢田寺「欲参り」信仰の成立とその唱導」(『唱導文化の比較研究』岩田書院、二〇一一年)。③同「矢田寺の「欲参り」信仰をめぐって」(『明治大学人文科学研究所紀要』七六、二〇一五年)。
- 5 本図については『生駒市の仏像Ⅰ北地区篇 生駒市文化財調査報告書第十二集』(生駒市教育委員会、二〇〇〇年)に図版が掲載されていることを確認したが、これまで『矢田地蔵縁起絵』伝本には加えられていない。本稿における『矢田地蔵縁起並地獄絵』の名称は、この報告書による。但し、原本(箱書を含む)および周辺資料などに、この軸に「矢田地蔵」という名称を冠して記している資料は確認できない。
- 6 金剛山寺本については、『社寺縁起絵』(角川書店、一九七五年)、『新修日本絵巻物全集 二九』(角川書店、一九八〇年)の図版および解説、前注②①論文に紹介されているが、残念ながら、現在も修復には至らないまま、奈良国立博物館寄託となっており、詳細を確認することができない。なお渡氏は、信仰そのものは康成蘇生譚に由来するとしても、金剛山寺本の図様は、満米上人の巡獄譚の巡獄部分を発展させたものとも考えられることを指摘されている。渡浩一「絵解きと矢田地蔵縁起」(『絵解き』有精堂、一九八五年)参照。
- 7 概略は、前注6渡氏論文より引用。京都矢田寺蔵「矢田地蔵縁起絵巻」二巻を元に要約したもの。
- 8 奈良国立博物館編『社寺縁起絵』(角川書店、一九七五年)二五一頁。
- 9 ①元興寺文化財研究所編『奈良県文化財調査報告書 四七 松尾山・矢田地域仏教民俗文化財調査報告書』(奈良県教育委員会、一九八五年)、②同編『金剛山寺の版本』(元興寺文化財研究所、二〇一三年)。
- 10 矢田型の地蔵は、いずれも錫杖を持つ形式をとらない。右手は親指と人差し指を、左手は親指と中指を結んでいる。このような印相の地蔵の姿は、満米上人が地獄で見た姿そのものであることを意味しており、寺では、地蔵と阿弥陀の徳をあわせもつことを表しているとされる。金剛山寺の本尊として祀られる地蔵菩薩立像は、左手に宝珠をのせるが、これは後補。鎌倉時代から室町時代の絵画作品はいずれも持物を持たない。説法印を解きゆるめたような印相は、唐代の地蔵菩薩の伝統を継承するものと考えられている。奈良国立博物館編『矢田寺の仏像』(同館、二〇〇一年)二八頁、渡浩一「満米上人巡獄譚」の成立と小野氏」(『伝承文学研究』二七、一九八二年)参照。
- 11 前注9②書、二三、八五―六頁。なお、奈良国立博物館蔵『矢田地蔵縁起絵巻』にも「欲参り」日が記されているが、十一月十九日は「むけんちこくのくをのかる(無間地獄の苦を逃る)」のほか、「けつぽんちこく(血盆地獄)」「さいのかはら(養の河原)」「くきねんふつのあきなり(釣念仏の縁起なり)」とある(『新修日本絵巻物全集 二九』

- 角川書店、一九八〇年、六六～七頁。
- 12 前注9②書、二四、八六頁。
- 13 前注9②書、四六、六三、六八、九〇、九三、九四頁。
- 14 前注9①書、二〇八頁。
- 15 前注9②書、元禄九年銘は、二四、八六頁。安政五年銘は、三〇頁。銘はなく、制作時期は未詳であるが、「五輪塔供養札」にも「矢田山／(地藏種子)本願／念仏堂」とある(前注9②書、三七頁)。寺社造営勸進の本願については、豊島修・木場明志編『寺社造営勸進 本願職の研究』(清文堂出版、二〇一〇年)参照。
- 17 国文学研究資料館所蔵マイクロフィルム(オ7-110-14)を私に翻刻した。
- 18 『兼見卿記』同日条にも、信貴山城の落城と久秀の死について記されている。
- 19 前注9②書、二、八五頁。
- 20 前注9②書、二二頁。
- 21 地名辞典などに記載がないため、『自治会便覧』(生駒市南田原町自治会、発行年未詳)、境内案内板などの解説を参照した。また、法薬寺を訪ねた際、昭和時代に記されたと思われる「由緒書」を拝見した。法薬寺に関する資料が少ないため、参考までにその「由緒書」の由緒について記された部分を紹介しておく。「由緒／聊々此ノ法薬寺ハ真言宗御室仁和寺派若蔵寺ノ末寺ナリ。旧寛文ノ頃、僧ノ開山ニシテ、当法薬寺ヲ創立セリ。本尊子安地藏尊並ニ外仏ナル石地藏尊ヲ刻ミテ、之ヲ安置ス。御靈験ノ著大ナルヲ伝ヘ聞キテ、安産ヲ祈願スル善男善女ノ数、年ト共ニ相加フ。古来、毎年七月二十三日ノ大祭祀、当日ハ路ノ遠近ヲ問ハズ参籠スル者、堂宇ニ満ツ。往昔ヨリ当寺ノ鐘ノ紐ハ女子懐妊スルヤ参拜人ニ御授ケアリ。之ヲ岩田帯トシテ胴に着用スル時ハ、安産ノ御利益誠ニ灼カナルコト代々伝フル所ナリ。爾来安政年間ニ再建セルモ明治三年当寺大イニ破損ヲ生ジ、同岩蔵寺ノ末寺ナル常福寺ヲ当法薬寺ニ合シシ、常福寺本尊薬師如来ヲ合祀セリ。毎年六月八日、七月二十三日両日ヲ定縁日ト定メタルニ、善男善女ノ参拝スル者、合寺ニ依リ益々多キヲ加ヘタリ。大正十四年更ニ大修繕ヲ施シ、堂宇ノ面目ヲ一新セリ。之ヲ期シテ毎年一回ノ祭祀ハ新暦ノ四月八日、八月二十三日ト改メテ現在ニ至ル。この由緒書に続いて「御仏」「旧南田原村真言宗諸寺」の項目が記されている。それぞれ、所蔵する佛像の一覧と南田原村の真言宗寺院の一覧となっている。なお、本稿をまとめた後、法薬寺世話方の皆様より、二〇一五年より行われた堂の改修に際し、棟木から「天明四年」(二七八四)の墨書銘が見つかったとの報告をいただいた。寛文年間に創建されたとするならば、その後、堂は天明四年に再建され、おそらく安政の大地震で損壊した後、修復が繰り返され、今回の平成の大改修に至ったものと考えられる。新しくなった法薬寺の堂は、二〇一六年一月二十四日に落慶法要が無事執り行われた。
- 22 『生駒市誌 資料編Ⅰ』(生駒市、一九八五年)三四〇～三頁。
- 23 前注5書。
- 24 二〇一五年八月二十三日に法薬寺を訪ねた際に、当資料の複写物を拝見させて頂いたが、原本の所在については未詳であり、筆者は未確認である。私に本文を読み下した。
- 25 前注4③論文。ここでは、渡氏が「矢田寺」と記述されている箇所を、便宜上、全て「金剛山寺」と書き換えた。
- 26 前注4②論文。
- 27 根津美術館編『根津美術館蔵品選 仏教美術編』(同館、二〇〇一年)一一七頁。
- 28 『新修日本絵巻物全集 二九』(角川書店、一九八〇年)六六頁。宝永六年(二七〇九)成立の金剛山寺南僧坊蔵『和州矢田寺縁起』下巻にも、老

翁四人が地藏の形像を刻む場面がある。前注8書、二四八頁参照。

29 渡浩一編『延命地藏菩薩経直談鈔』勉誠社、一九八五年)五〇二―五三頁。

30 渡浩一「地藏信仰と靈驗記」(『岩波講座 日本文学と仏教 七』岩波書店、一九九五年)。

31 『地藏靈驗記絵詞集』(古典文庫、一九五七年)に翻刻あり。

32 前注30論文、および須田学「願成寺地藏尊縁起」翻刻・論考」『古代中世文学論考 三』(新典社、一九九九年)。本文で挙げた縁起のほか、神戸市願成寺蔵『撰州烏原村願成寺地藏尊縁起』は、満米は六体まで

地藏像を彫刻したが似なかった(所々に矢田寺とって地藏像を安置しているのはこれである)。すると、そこへ春日明神が四人の老翁となって現れ、生身地藏とそっくりの地藏を完成させた。これが本尊となつたと伝えている。この縁起については、右の論考のほか、浜畑圭吾「願成寺をめぐる二つの縁起」(『アジア遊学』一七四、二〇一四年)でもふれられている。このほかにも、奈良県五條市の桜井寺に伝わる『桜井寺縁起』など、矢田地蔵に関わる縁起は数多い。右の諸研究を参照されたい。

33 前注30論文。

34 前注9②書、二四九頁。

35 前注2②論文。

36 翻刻は『略縁起 資料と研究』二(勉誠出版、一九九九年)。同書に所収されている米谷匡代「矢田地蔵縁起考」もあわせて参照されたい。

37 「享保甲辰九年改 金剛山寺明細帳」(『大和郡山市史 史料集』大和郡山市、一九六六年、一六一頁)。

38 前注2①論文。

39 現在、練供養は行われていない。

40 龍谷ミュージアムほか編『極楽へのいざない』(同館、二〇一三年)一三〇―一頁。なお、明治十五年(二八八二)の『練供養図』では、本

堂に向かって、楽人を先頭に、十王、閻魔王、赤鬼(十王の途中)、

満米上人、小野篁、青鬼、児、二十五菩薩、僧侶と続いている。大正七年(一九一八)の『練供養図』は、これと異なる順序で描かれており、変化していることがわかる。しかし、いずれも十王と二十五菩薩を中心とした練供養となっている。前注9②書、七九頁参照。

41 『大和郡山市史』(大和郡山市、一九六六年)七五九頁。

42 前注4③論文。

43 本稿ではふれなかったが、『直談因縁集』巻八―三七は、経帷子の由来が矢田地蔵縁起を素地として記されており、『延命地藏菩薩経直談鈔』巻三―三九(以下、『直談鈔』)にも概ね同話が確認できる。『直談鈔』では、矢田地蔵の靈驗譚とはっきり記されており、紀州名草郡高尾(高尾村、現在の和歌山県紀の川市)の鈴木良基なる人物が矢田地蔵によって救済される話となっている。浄土宗鎮西派の僧侶である袋中の『泥洹の道』(東京大学史料編纂所蔵)にも「経帷(中)コロ日本紀州ニ始ルト云」とあり、経帷子の由来は、早くから紀州と結びつきを持つて伝承されていたことが推察される。現存する版本を含め、僅かな金剛山寺の古文書類には、そのような記述は確認できないが、江戸時代末期から明治時代の版本には「御経帷子／和州矢田山／檀籠念仏院」(前注9②書、五三頁)、「御経肩衣／矢田山／南僧坊」(前注9②書、六九頁)の版本が現存しており、類話がこれらの由緒として語られていた可能性も考えられる。また念仏院では、「安産守」を施与していたようで、「安産守」「和州矢田山／安産御守護／地藏菩薩」(前注9②書、四一頁)と刻まれた小さな版本が現存している。明治時代のもので推定されるが、同様の利益は、広く知られていたはずで、これもまた矢田地蔵の利益譚とともに語り広められたものであったのかもしれない。

(本学専任講師)

图3 法薬寺本箱書



图1 法薬寺



图4 石仏と名号碑



图2 法菓寺蔵『矢田地蔵縁起並地獄絵』

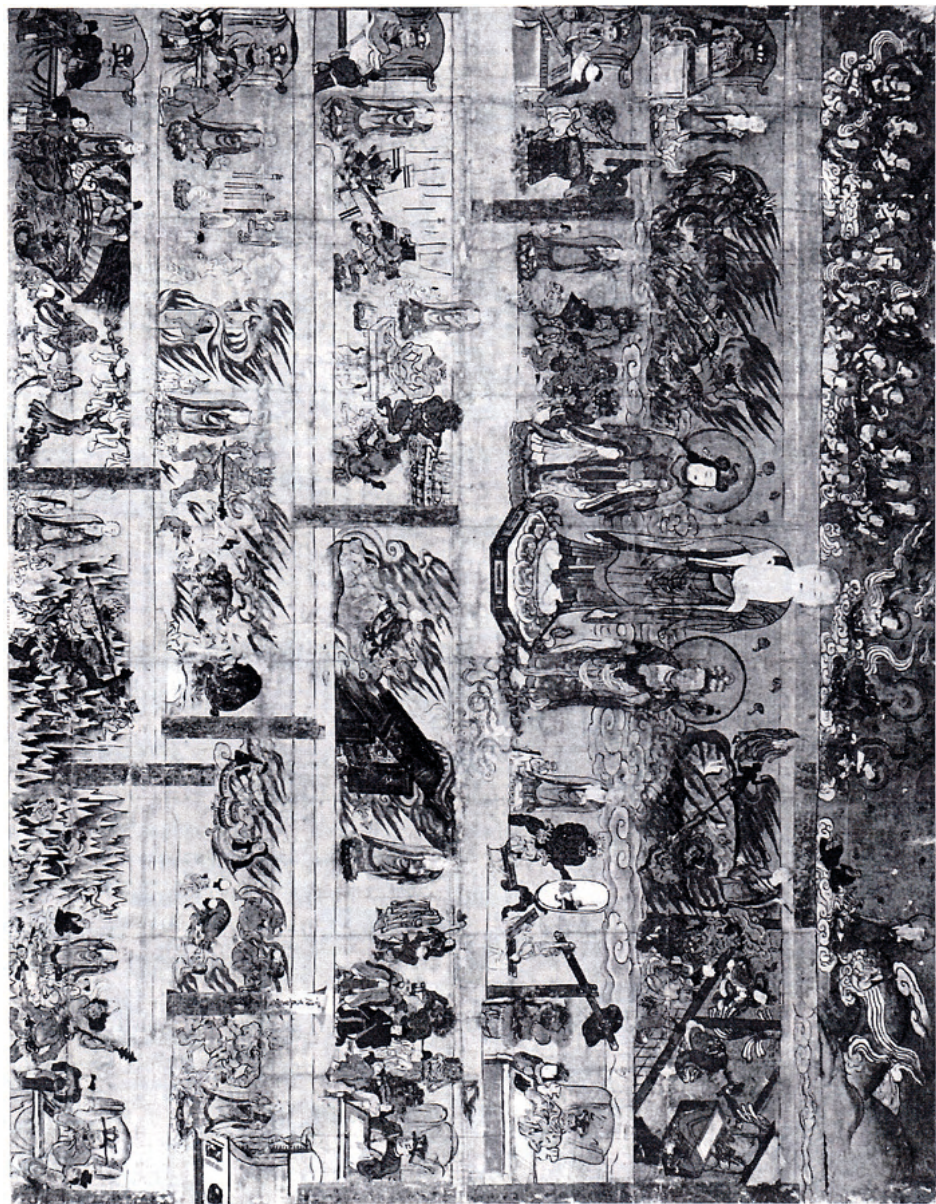


图5 金剛山寺本



图6
法藥寺本



图7 法藥寺本



图8 法薬寺本



图9 法薬寺本



图10
法藥寺本



图11 法藥寺本



图12 法藥寺本



图13 法藥寺本



图14
法藥寺本



图15 金剛山寺(三幅)本 第一幅目